

大分県の民族芸能

(九)

染 矢 多喜男

17 犬山神楽

大野郡大野町に鎮座する、本上津神社に伝承された上津流（浅草流とも称された）の神楽で、豊後岩戸神楽の一派である。

一、番付・趣意

- 1、神開 岩戸神楽の第一番に奉納するもの。
- 2、五方礼始 東・西・南・北・中央の五方の神が集り、神社の土地を清め幸あれと祈り給うものである。
- 3、天瓊矛 伊邪那岐・伊邪那美命が天浮橋に立つて、天瓊矛で青海原をかき給う状の舞である。
- 4、柴引 山雷命が岩戸開の時、天香具山の真榊を根こぎにする状の舞である。
- 5、庭火 天岩戸の前で庭火を焚く状の舞である。
- 6、岩戸開 天照大神が籠られた天岩戸を天手力男命が押し開く状の舞である。
- 7、岩戸舞 岩戸開も無事に終つて、八百万の神達が喜びに堪えず、舞う状である。
- 8、両種 天照大神が此の世に出られたのを祝い、八百万の神達が舞う状である。
- 9、柴入 八百万の神達が岩戸の前で、榊葉をさやけく祝い舞う状である。
- 10、劔 岩戸開を祝う武者の太刀の舞である。
- 11、武者 鹿兎弓ともいう。八百万の神達が天鹿兎弓・天波々矢をもつて舞う状である。

- 12、誓約 天照大神が素盞鳴尊の真意を問ひ、御誓約なされる状の舞である。
- 13、綱之波 天八千々姫命が神衣を織り、よく洗いすすぐ状の舞である。
- 14、綱之武 忌服屋に素盞鳴尊が入られ、荒び給うのを神達が防ぎ奉る状の舞である。
- 15、神遂 素盞鳴尊を根の国に追払う状の舞である。
- 16、綱伐 素盞鳴尊が簸川上で大蛇を切り給う状の舞である。
- 17、八雲払 綱伐と同じ神話の舞である。
- 18、返し矢 高皇産靈命が名鳴女を射殺した矢を返す状の舞である。
- 19、平国 磐裂・根裂・磐筒男・磐筒女四神の荒魂を振り起す状の舞である。
- 20、天皇位 高皇産靈命が神々と御相談の結果、経津主神・武甕槌神を遣して大国主命に国譲をさせる状の舞である。
- 21、舞入 伊邪那岐命が永久に自凝島に鎮るをことほぎ奉る意の舞である。
- 22、降臨 天孫降臨の時に猿田彦命に導かれて、日向の高千穂に至る由来の舞である。
- 23、太平楽 天孫降臨も無事に終つて、天下太平を謳歌し楽しみ舞う状である。
- 24、貴見城 火須勢理命と彦火々出見命が釣竿と弓矢を交換したが、魚にとられた釣竿を返せと強要される状の舞である
- 25、地割 猿田彦命と天鈿女命とが互に問答する状の舞である。
- 26、魔払 八百万の神々が中国の邪神を平げ給う状の舞である。
- 27、五穀舞 素盞鳴尊が切り殺した受食神の死体から五穀が生じ、それを植えて五穀豊穣を祝う状の舞である。
- 28、手撒米 天狭田・長田に植えた稲の豊穣を祝う状の舞である。
- 29、天之注連 天孫降臨の盛式を現した状の舞である。
- 30、返拜 素盞鳴尊が根国から帰り給う状の舞である。

- 31、荒神 湯立ともいう。武内宿禰の探湯の故事による湯立の舞である。
- 32、心化 天照大神と素盞鳴尊が誓約をされて生み給うた八柱の神の舞である。
- 33、大神 岩戸神楽の最後に勤むるもので、天下太平を祝い納むる舞である。

一、配役・人数・装束・採物・頻度

配役・人数・装束・採物・頻度は別表に示す通りである。

三、舞い方

- 1、神開 礼拝し、三礼の手を舞う。五つのひらみせを四方舞い巡る。舞戻りの手で終る。
- 2、五方礼始 五方の座で礼拝する。三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。神歌で巡る。五つのひらみせで幣を前後に捧げる手で四方を舞い巡る。幣流しに膝突の手で四方舞い巡る。舞戻りの手で終る。
- 3、天瓊矛 男神・女神が向い合つて礼拝する。三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。神歌。矛で掘る手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。
- 4、庭火 二人がまず出る。続いて五人が出て、向い合つて礼拝する。三礼の手を舞う。五人が坐る。二人は七しようがで護摩焚きの手を舞つて帰る。五人は五方に座を配つて、五つのひらみせの手を四方舞い巡る。幣流しの手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。
- 5、岩戸開 供神四人と天鈿女命が次々に出る。鈿女を中央にして座を配る。礼拝する。三礼の手を舞う。鈿女が掛取をする。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。五人は坐る。手力雄命が出て礼拝をする。三礼の手を舞う。採りの手を終つて戸開きをする。供神等を連れて帰る。

配役・人数・装束・採物・顔位

番	番	行	配	役	人	毛	面	髪	具	髪	大	袖	手	神	脚	靴	其	他	扇	太	刀	其	他	顔
1	神	間			1																			A
2	五方札	給			5																			A
3	天	遣	伊	新	命	1																		C
4	榮	引	伊	新	命	1																		A
5	輝	火			2																			C
6	岩	戸	手	力	命	1																		A
7	岩	戸	手	力	命	4																		A
8	内	熊	1	・	4	番	2																	B
9	榮	人	2	・	5	番	2																	C
10	前		3	・	6	番	2																	A
11	武	者	4																					C
12	普	約	天	照	大	神	1																	A
13	綱	之	天	照	大	神	1																	A
14	綱	之	八	千	女	命	1																	B
15	神	達	八	千	女	命	4																	B
16	綱	代	八	千	女	命	1																	A
17	八	雲	手	名	足	能	1																	A
18	逐	し	手	名	足	能	1																	B
19	平	國	手	名	足	能	3																	C
20	天	皇	手	名	足	能	2																	B
21	舞	入	手	名	足	能	4																	C
22	珠	籠	手	名	足	能	1																	C
23	太	平	手	名	足	能	1																	C
24	貴	見	手	名	足	能	2																	B
25	地	割	手	名	足	能	2																	A
26			手	名	足	能	2																	C
27	五	穀	手	名	足	能	1																	B
28	手	磨	手	名	足	能	4																	C
29	天	之	手	名	足	能	1																	A
30	返	拜	手	名	足	能	1																	A
31	荒	神	手	名	足	能	1																	C
32	心	化	手	名	足	能	3																	C
33	大	神	手	名	足	能	1																	A

6、岩戸舞 四人が次々に出て四方に座を配る。向い合つて礼拝する。三礼の手を舞う。太刀を抜いて、三つのひらみせで引き抜ぐ手を四方舞い巡る。太刀を置く。弓矢で武者返りの手を舞う。舞戻りで終る。

7、両種 六人が次々に出る。神殿に向つて右側に一・二・三番、左側に四・五・六番が並ぶ。三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。一・二・三番が上座、四・五・六番が下座から向い合う。二・五番は太刀を抜いて、五つのひらみせで行き抜き、次の座に移る手を四方舞い巡る。二・五番は太刀を納め、舞戻りで終る。

8、柴入 正面に向いて礼拝し、三礼の手を舞う。五つのひらみせを四方舞い巡る。神歌。四人が向い合つて、五つのひらみせで幣を前後に捧げる手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

9、劔 四方の座で向い合つて礼拝する。その座で三礼の手を舞う。五つのひらみせで膝突きの手を四方舞い巡る。神歌で巡つて礼拝する。太刀で三つのひらみせで、しやつくりの手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

10、武者 四人が次々に出る。四方に座を配り、向い合つて礼拝する。三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る神歌で巡る。三つのひらみせのチョイチョイで、前後をやらう手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

11、誓約 姫が弓と矢を持つて出る。供神が三方に玉を載せて続く。荒神に続いて供神が三方に劔を載せて続く。荒神と姫は供神と並んで向い合う。礼拝して三礼の手を舞う。姫と荒神が掛取る。終つて、姫と荒神は供神の持つ玉と劔を取替へ、四隅を切つて廻る。三つのひらみせの手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

12、綱之波 まず、姫が出る。四方を一廻りして三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。幣と鈴を置く。袖舞の手を四方舞う。布をとる手を二方舞う。ひきやくが出る。布をとつて姫に渡す手を二方舞う。晒の手を二方舞う。正面に置いて坐る。ひきやくは終始おもしろおかしく姫の動作を真似る。両人は幣と鈴を持つて立つ。三つのひらみせで切返えしの手を二方舞う。ひきやくは帰る。姫は舞戻りをして帰る。

13、綱之武 まず四人が一本の長い木綿の四か所を左手に、鈴をそれぞれ右手に持ち、後る首に幣を差して出る。四方に座を

配つて三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡つて、坐つて待つ。素盞が劔を持つて出る。隅違ひの手を四方舞う。舞戻りをして劔をおく。木綿を取る手を一番から四番まで舞う。この時四人は立つ。次に四人が巻き合う手を繰返えし舞う。素盞は木綿をとつて禰にし、劔を取つて舞戻りをして帰る。四人は鈴と幣を取つて舞戻りをして終る。

14、神逐　まず四人が出る。礼拝をして三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。坐つて待つ。荒神が劔を持つて出る。四方を切り巡る。舞戻りをして中央に坐る。四人が立つて、荒神に切りかかる手を四方舞い巡つて舞戻る。三つのひらみせで太刀をおく。行抜いで戻る。太刀をとり、四方を舞い巡る。荒神が立つ。四人が並んで荒神と向い合う。逐の手を四方舞い巡る。荒神は追われて去る。四人は四方にわかれ、三つのひらみせで一番と三番が中に飛ぶ。武者返りの手を四方舞い巡り、舞戻りの手で終る。

15、綱伐　坐つて二礼・二拍手で礼拝する。立つて、四方を差し巡る。前後三礼の手を終つて、綱に向つて掛取る。大蛇との格斗になぞつた、する手・飛ぶ手を扇子で四方舞う。礼拝して正面に向つて掛取る。礼拝して綱に向つて掛取る。太刀でする手・飛ぶ手を四方舞つて、綱を伐る。坐つて礼拝する。舞戻りの手で終る。

16、八雲払　姫・足名・手名が出る。礼拝して三礼の手を舞つて坐る。素盞が徐ろに出る。礼拝して三礼の手を舞う。足名・手名・姫を見て廻り、掛取る。終つて扇子舞の手を四方舞い巡る。舞戻りをして坐る。姫が立つ。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。舞戻りをして姫は帰る。素盞が立つ。扇子を置いて太刀の手を四方舞う。大蛇に見立てた綱を切る。舞戻りの手を舞う。神歌。歌が終れば素盞が帰る。足名・手名も続いて帰る。

17、返し矢　向う立が出る。礼拝して三礼の手を舞う。四人（二人は弓矢と鈴、二人は太刀と鈴）が出る。礼拝して三礼の手を舞う。向う立が掛取る。終れば向う立は帰る。四人が五つのひらみせの手を四方舞い巡る。神歌で巡る。チヨイチヨイの手を四方舞う。舞戻りで終る。

18、平国　姫が出る。続いて三人が出て、姫と向い合う。礼拝して三礼の手を舞う。三つのひらみせで、切合う手を四方舞い

巡る。舞戻りの手で終る。

19、天皇位　まず向う立三人が出る。三礼の手を舞つて、上座で立つて待つ。供神二人が出て、上座に向つて三礼の手を舞う。五つのひらみせ・膝突の手を舞い巡る。掛取。向う立一番。掛取が終れば、向う立三人は帰る。供神二人は上座に坐つて待つ。大国主が出る。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。供神二人が太刀を抜いて、大国主の前に立てて、掛取る。終れば大国主は帰る。供神二人が上座・下座に分かれて向い合う。五つのひらみせでしやくる手を四方舞い巡る。鈴を置く。太刀を右手に紙を左手に持つ。チヨイチヨイで中に向い合う。太刀を握り合う手を四方舞い巡る。舞戻りをして、太刀を納めて腰にさす。幣と鈴を取つて、正面に向つて拝礼をして帰る。

21、舞入　四方に座を配つて礼拝する。三礼の手を舞う。七しようがでする手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

22、降臨　まず猿田彦が出て、次に出る鈿女と出合つて掛取る。掛取が終れば四人が出る。二人ずつに分かれて、猿田と鈿女に付いて向い合う。三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。三つのひらみせで切り合う手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

23、太平楽　一番と二・三番が向い合う。礼拝して三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。二・三番は鈴を置く。チヨイチヨイで行き抜ぐ手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

24、貴見城　まず向う立三人が出て、三礼の手を舞い、正面に坐る。四人が出る。向う立と向い合う。三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を前後に舞い、四方舞い巡る。旧の座に戻つて、礼拝して坐る。掛取る。終れば向う立は帰る。四人が四方に分かれて鈴を置く。太刀で三つのひらみせで行き抜ぐ手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

25、地割　まず荒神が杖を持つて出る。三礼の手を舞い、掘る手を四方舞い巡る。舞戻りをして下座に腰掛けて待つ。供神一番・二番・地神・供神三番・四番が出る。地神は上座に腰を掛け、供神は地神の両脇に二人ずつ坐る。荒神が立つて、地神をたしかめる手を舞い、旧の座に腰掛ける。地神と荒神が掛取る。終れば地神が先に、荒神が続いて帰る。四人が立つて、

四方に座を配る。武者返りの手を舞う。舞戻りで終る。

26、魔払 四人出る。二人ずつ向い合つて礼拝する。三礼の手を舞う。鈴を置く。チヨイチヨイで二回行き抜ぐ手を四方舞い巡る。武者返りの手を舞う。舞戻りで終る。

27、五穀舞 まず受食と素盞が出る。礼拝して三礼の手を舞う。掛取る。終ればチヨイチヨイの手を四方舞い巡る。受食は帰る。供神四人が三方に五穀を入れて持つて出る。素盞中央・供神四方に座を配る。礼拝して五つのひらみせで行き抜ぐ手を鈴を取つて四方舞い巡る。舞戻りの手で終る。

28、手撒米 四人が米を入れた折敷を持つて出る。向い合つて礼拝する。三礼の手を舞う。五つのひらみせで撒く手を四方舞い巡る。鈴を持つて、五つのひらみせで行き抜ぐ手を四方舞い巡る。舞戻りで終る。

29、天之注連 供神と荒神が出る。荒神ははじめ素手で、次に幣で供神と向い合つて礼拝する。さし廻る手を四方舞う。荒神が矢を持つて、一日落しに固める手を舞い、同時に綱を切る。

30、返拝 まず供神が出る。礼拝して三礼の手を舞う。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。荒神が出て供神と向い合う。さす手を二人で四方舞い巡る。

31、荒神 まず供神が出る。三礼の手を舞い、おはらいをあげる。荒神が素手を腰にあてて出る。呪文をとなえる。榊葉で湯さましの手を舞う。湯をあびる手を舞つて終る。

32、心化 まず五人が、続いて三人の姫が出て向い合う。礼拝して三礼の手を舞う。三つのひらみせで前後を掘る手を四方舞い巡る。舞戻りの手で終る。

33 大神 出ると幣流して一巡りし、礼拝する。五つのひらみせの手を四方舞い巡る。舞戻りをして正座する。二礼・二拍手一拝して終る。

四、神歌・掛取

2、五方礼始

伊勢も神熊野の神も祖なれど

伊勢こそ神のはじめなりけり

皇神のみとのまぐわいせし日より

思ぞ深き月読のみこ

3、天瓊矛

天の下国は多けど神ろぎの

生みなしませる大八島国

9、柴入

伊勢も神熊野の神も祖なれど

伊勢こそ神のはじめなるぞや

10、劔

巡り合いてよしやそれとはわかぬ間に

雲を霞と逃ぐる敵かも

大己貴少名御神のよろしくも

つくりかためし大八島国

11、武者

千早振る神に御神楽なかりせば

天の岩戸は開かざらまし

12、誓約

姫「こうなせの命来たることめに良き心を以つてせんや。思うにまさに国を奪わん志ありてか。諸々の神にことよせ給いて、各々其の境を保たしむ。いかんぞ行くべき敵であえて此処をうかがわんや。」

荒神「やつがれ始めより穢き心なし。ここを以つて雲霧を踏み渡り、大姉の命と相見えざんば思いよらざるきつ言うこと。」

姫「汝何を以つてか汝が清き心をあかさんや。」

荒神「それ、うけあわん。誓約の中に必ずまさに子を産むべし。やつがれ産めらんたおやめなれば悪しき心ありとおぼせ。」

姫「その物種を尋ねれば、八坂瓊五百箇御統はわが物なり。その十握の劔は素盞鳴尊の物なり。此の五柱の彦神はことごとくに汝が子なり。」

16、綱伐

「謹請、此の綱の呪文に日く、神代の昔、素盞鳴尊為行甚だ悪しきによりて、天照大御神天岩戸をさしてこもります。かれ国の内常闇となる。昼夜の相変わるときの分ちも知れず。時に八百万の神達天安河原に集り給いて其の祈るべき状を計る。諸々の神のたたえ事、悪しき行をしりぞけ給いて、天照大神天岩戸を押し開きて、昼夜の相変る時の分ちを遍く其の国にみてしめ給う。その神業の起こりなるが故に、ひつぎをしるしめして、共に高天原に誓約て日く、他人の国より我が国と、他人の為より我が為と。かれ天長く地久しく、君樂しみの為やそんじこと、白浪の襲い來れる惧もなく、種々の罪科ことにたたりもなく祝米を切り安らけく平らけく聞し召しては、一天の泰平・さとう康平・家門繁栄・福祿円満・一々御安・赫々成就の為として唯今此の綱を伐り鎮め奉る。而るによりて五方あり。」

東方に向つて、「謹請、東方は木祖句廼馳命の眼のあたりに切り鎮め奉る。」

「謹請、南方は火祖軻遇突智命の眼のあたりに切り鎮め奉る。」

「謹請、西方は金祖金山彦命の眼のあたりに切り鎮め奉る。」

「謹請、北方は水祖罔象女命の眼のあたりに切り鎮め奉る。」

「謹請、中央は土祖埴安媛命の眼のあたりに切り鎮め奉る。」

正面に向つて、「謹請、当社御神の広前に於て、畏れ畏れみも慎しみ敬つて白す。大願主当社氏子中、心願成就の爲として、唯今此の綱を切り鎮め奉る。尚其の上にも御神徳を願ひ上げ奉るに於ては、五穀豊熟祈願のため、並に火伏病除・家内安全・牛馬の蹄に至るまで、安穩息災・延命如意安全に護り給へと願う所、かんこう成就の爲として唯今此の綱を切り鎮め奉る。」

綱に向つて、「抑々、吾腰に佩かせる刀といつば、神代の昔、素盞鳴尊天よりして出雲の国簸の川上に天降りまして、八岐の大蛇を退治したもう、十握の劔とは即ち之なり。銷先は三柱の大神、柄頭大明打つたる目扱は龍眼にして、切尖は諸々の大神、中は即ち天児屋根命、抜いたる光は日月の如し。是によりていかなる悪魔も切り鎮めんとの御請願、是によりて如何なる大願も成就せんといふことなし。」

17、八雲私

素盞「汝等はたぞや。なんぞかく泣くや。」

足名「答えて申さく、吾が名は足名椎、吾が妻は手名椎と申すなり。吾さきに八人の乙女ありといえども、年毎に八岐の大蛇がために吞まれんとする。逃るるに由なし。此の故に痛み申す。」

素盞「いましに清き姫を与えなば吾謀り申さん。」

足名「みことりのりのままに奉る。これ素盞鳴尊の大神。」

素盞「然らば吾計り申さん。八塩折の酒をかみ合せ、もりもつて待ちなば果して大蛇来らん。八尾八谷が間はえわたり、きつき山おい、そびらに松・柏生い、眼はあがづちの如く、頭各々八岐をそろえ、その時乙女を伊津のつまぐしにとりなし、八つの酒槽に身をうつし入れ、酒を呑み酔いて眠らん。其の時吾腰に帯びたる十握の劔を抜いてずゝたずたに退治せんと思ふなり

八雲立つ出雲八重垣妻籠めの

八重垣作るその八重垣を

18、返し矢

「此の矢はいん先、吾天稚彦に賜いし矢なり。今何の故に此処に來たらんや、と矢を取りてほぎて日く、悪しき心を以つて射らば天稚彦必ずまじえなん。清き心を以つて此の矢を返し給うぞ。」

千早振此処も高天の原なれば

集り給え四方の神々

20、天皇位

向立一番「高皇産靈命皇孫を豊葦原中国に降し給わんとす。荒振神共を払いむげんと思ふに誰を遣さば是れよげんや。」

向立三番「磐裂・根裂神の子、磐筒男・磐筒女神の子、経津主神是れよげん。」

供神一番「豈唯経津主神一人丈夫にして、やつがれば丈夫に非ずや。」

供神二番「豈さありますさお否や。」

向立一番「いましもつて経津主神に副えて向けしむ。」

供神一番「天津神宣を受け、此の国に降り給いし武甕・経津主神是れなり。」

供神二番「何れの神に問い給いて、而して後に返事申さんや。」

大国「吾子事代主神に問い給いて、而して後に返事申さん。」

22、降臨

鈿女「天照大神の御子の出でます道にかく居るは誰ぞや。」

猿田「天照大神の御子今出でますと聞く。故に迎えまつりて相待つ。吾が名は猿田彦神なり。」

鈿女「いまし將に吾に先立ちて行かんや。はた吾いましに先立ちて行かんや。」

猿田「吾先に立ちて導き到りまさんや。」

細女「いましは何処に到りまさんや。天照大神の御子は何処に到り給わんや。」

猿田「天神の御子は正に筑紫の日向の高千穂のくしぶる岳に到りますべし。吾は伊勢の狭長田五十鈴の川上に到らん。」

24、貴見城

向立一番「いましたちは此処にましまして、何の故にかく憂い給うぞ。」

向立三番「火須勢理命兄は山の幸を追い、吾は海の幸を追い、釣鈎を大海原に失ないし故にかく憂い給うぞ。」

25、地割

地神「八雲立つ出雲八重垣妻籠めの

八重垣作るその八重垣を」

荒神「朝香山影さえ見えぬ山の井の

浅くも人を思うものかわ」

地神「伊勢も神熊野も神の祖なれぞ

伊勢こそ神のはじめなるぞや」

荒神「谷は八つ峰は九つそが中に

多く集まる神ぞあるなり」

地神「すめ神のみとのまぐわいせし日より

思ぞ深き月読の御子」

荒神「久方の光のどけき春の日に

静心なく花や散るらん」

地神「あかあかと目にはさやかに見えねども

風の音にぞ驚かれぬる」

荒神「吾がたのむ七つの森の夕だすき

かけてはもとの道に帰さん」

地神「大日貴・少名御神のよろしくも

つくりかためし大八島国

荒神「吾が宿はひききょうのものとの石たたき

幼きことを人に教えん」

地神「よくよく見奉れば、よもきげん恐しき貌はんべり給い、額には四海の波をたたえ、眉の毛は長く生い下り、目は日月灯明の光りたるが如くある。鼻は四海の陰陽を通じ、耳はぼだいの地につたの葉の落ちかかりたる如く、口は大にして動く時は生あるもの、動かぬ時は木石にも異ならず、齒は三三枚、胃は三三点とも見る。傍に小松千本・柳千本・そくじゆ七五本あらかやかに生やし、東州国の神ならばその色青かるべく、南州国の神ならばその色赤かるべし。西州国の神ならばその色白かるべし、北州国の神ならばその色黒かるべし。中州国の神ならばその色黄かるべし。東州国の神にても非ず。南州国の神にても非ず。中州国の神にても非ず。青・黄・赤・白・黒五色の色にてもはんべり給わず。神なら神と現わし給え。此の神司は三尺二寸の幣方もち、注連より外にしるびやかに押出し申す。」

荒神「抑々、これ荒神のついて現じたる杖とて之なり。木のえ木のとの杖・火のえ火のとの杖・金のえ金のとの杖・水のえ水のとの杖・土のえ土のとの杖とて、五方に五本の杖、八方に八本の杖、一二方に一二本の杖、竹中・梅中・かつ中とて四つの杖、之をういて東方に向い、金剛力万束をと三度唱え、七束引いて此の宮を開く七つの森道を教えん。東方六万里にも五大力大人大くとして一二隻の舟を揃え、青金を積んで是れ荒神の杖を櫓權となし、東方六万里にも漕ぎ行き漕ぎ返し、東方の段の柱

と奉る。南方七万里にも五大力大全くとして一二隻の舟を揃え、赤金を積んで是れ荒神の杖を櫓となし、南方七万里にも漕ぎ行き漕ぎ返し、南方の段の柱と奉る。西方八万里にも五大力大全くとして一二隻の舟を揃え、白金を積んで是れ荒神の杖を櫓となし、西方八万里にも漕ぎ行き漕ぎ返し、西方の段の柱と奉る。北州九万里にも五大力大全くとして一二隻の舟を揃え、黒金を積んで是れ荒神の杖を櫓となし、北州九万里にも漕ぎ行き漕ぎ返し、北州の段の柱と奉る。皆是れ荒神の杖について献じたる杖。うらは玉垣中けいなり、柄元ははつこつこの石の杖。如何に神事を行うぞや。」

地神「さても荒神殿をば見とがめて申す。吾今尊き祝詞を申すべし。祈りの程をよく聞き給え。掛巻くも畏き古、天地未だ分かれざる時、天御中主神・神皇産靈神・伊邪那岐・伊邪那美命を此の国に申し降りし、天浮橋に立ち、天逆矛をもちて潮をまじしかば、矛の尖よりしたたりし潮凝りて一の島となる。名付けて自凝島といひし、今に至りて豊葦原中国淡路島とは此の国なり。其の時、夫々司る神あり、木を司る神を句々廻馳命、火を司る神を軻遇突智命、金を司るを金山彦命、水を司る神を罔象命、土を司る神を埴安媛命、国を守護する神を国常立命・大国主命、五穀を守護する神を月読命・受食命、かやを守護する神をかや火の命、其の時五草・百草に至るまで皆夫々司る神あり、其の大御神に名付けて善神と申す。」

荒神「善神とは善には悪、悪には善あるなり。影に形の添うが如く、荒神八千代として八万四千の眷族、吾信するともがら悪を防ぎ、善を招きよせることまたたくせんまなり、天地万物皆是れ荒神の杖を以つて立てたること疑なし。当社神に問い給えば、なおまた其のいわれ申すべし。吾が神靈は神殿に御霊と共にまします。其処を立ち退くべし。立ち退くべし。」

地神「さても荒神殿にてまします。」

荒神「然らば」

地神「さても荒神殿と申すは、他人の為より吾が為と、他人の国より吾が国と、他人の国に來りて守護せんとは。王命にもはばかりず、おうて勝負を遂げ申さん。」

荒神「さらば立つて本望を遂げ申さん。」

地神「いよいよ勝負を遂げ申さん。」

荒神「いよいよ勝負を遂げ申さん。」

供神一番「東西東西、当社御神事ござる所に於て、地神・荒神の御争や如何に、日も早やはつかに傾き給えば、両者ともすみやかに御立ち退きなさるべし。」

27、五穀舞

素盞「穢きかないやしきかも、むしろ口よりたぐれる物を以つて吾にこうべけんや。」

五、囃子

各番付毎の囃子の順序は別表の通りである。同表の記号について簡単に説明すると、Aは「セギリ」といい、神楽始めの囃子である。

Bは「三礼」といい、ゆるやかな囃子である。Bは綱切のみの「三礼」である。Cは「本調子」といい、一段と激しい囃子である。Dは「中メグリ」といい、歌詠みや小休止、次の舞に移る時などの囃子である。Eは「舞戻り」といい、神楽の終る区切りの囃子である。Fは帰りの囃子である。Gは「ナナシヨウガ」という。Gは「道行」といい、神幸祭などに奏する。Hは「雅楽」という。

六、面

一 二種・一四面ある。三面は明治以後の製作で彫刻者も判明しているが、他は製作年代・作者とも不明である。材料は樟の三面を除いて他は桐である。飛脚面は製作が明治以後であるが、他神楽から導入したものであるうか。姫面は細長く、眉を描き、肉付はかなりよい。素盞鳴面の種類が多いのは大野郡の神楽に共通した特色である。名称・材料、色彩・彫刻者・製作年使用番付などは別表の通りである。

七、沿革など

樂 子

No.	番 付	順 序							
		1	2	3	4	5	6	7	8
1	神 開	A	B	C	D	E	F		
2	五 方 礼 始	A	B	C	D	C	E	E	
3	天 瓊 矛	A	B	C	D	C	E	F	
4	柴 引	A	C	E	F				
5	庭 火	A	B	G	E	F	C	E	F
6	岩 戸 開	A	B	C	B	C	H		
7	岩 戸 舞	A	B	C	E	F			
8	兩 種	A	B	C	D	C	E	F	
9	柴 入	A	B	C	D	C	E	F	
10	劍	A	B	C	D	C	E	F	
11	武 者	A	B	C	D	C	E	F	
12	誓 約	A	B	C	D	C	E	F	
13	綱 之 波	D	C	C	E	D			
14	綱 之 武	A	B	C	E	F	E	F	
15	神 逐	A	B	C	C	E	F		
16	綱 伐	A	B	G	C	G	C	F	
17	八 雲 弘	A	B	C	E	C	E	F	
18	返 矢	A	B	C	D	C	E	F	
19	平 国	A	B	C	E	F			
20	天 皇 位	A	B	C	B	C	E	F	
21	舞 入	A	B	G	E	F			
22	降 臨	A	B	C	D	C	E	F	
23	太 平 楽	A	B	C	E	F			
24	貴 見 城	A	B	C	B	C	E	F	
25	地 割	A	B	C	B	C	E	F	
26	魔 弘	A	B	C	D	C	E	F	
27	五 穀 舞	A	B	C	E	F			
28	手 撒 米	A	B	C	D	C	E	F	
29	天 之 注 連	C							
30	返 拜	A	B	C	G				
31	荒 神	A	B	C	G	H			
32	心 化	A	B	C	E	F			
33	大 神	A	C	E					

順	名	稱	縦・横	材料	色	彩	彫刻者名	製作年	使	用	番	付	旧所蔵者
14	姫	姫	19×13	桐	顔白・眉黒・唇赤	唇赤	黒野桂太郎		降臨・八雲弘・綱之波・岩戸開・心化				在
14	退	治	22×14	〃	顔白・眉黒・唇赤	唇赤	明	不明	降臨・八雲弘・綱之波・岩戸開・心化				不明
2	退	治	27×23	〃	顔白・眉茶・唇赤	唇赤	〃	〃	八雲弘				〃
3	燵	燵	22×14	樟	顔薄小豆		〃	〃	八雲弘				〃
4	翁	翁	22×14	〃	顔薄小豆・眉黒・唇黒	唇黒	〃	〃	八雲弘・返矢				〃
5	猿	田彦	25×21	桐	顔赤・眉金・唇金	唇金	〃	〃	降臨・天之注連				〃
6	蟹	約	25×22	〃	顔赤・眉黒・唇金	唇金	〃	〃	誓約・天皇位・五穀舞				〃
7	表	誓	26×21	〃	顔赤・眉黒・唇金	唇金	〃	〃	柴引・岩戸舞・天皇位・貴見城・地割・返拜				〃
8	綱	之武	25×17	〃	顔白・眉茶・唇赤	唇赤	〃	〃	綱之武				〃
9	柴	引	25×19	〃	顔赤・眉薄・唇赤	唇赤	〃	〃	岩戸舞・綱之武				〃
10	神	丞	25×18	〃	顔白・眉赤ヨコ・唇赤	唇赤	〃	〃	神丞・綱之武				〃
11	小	踊	23×18	樟	顔小豆・眉黒・唇黒	唇黒	〃	〃	五穀舞				〃
12	飛	脚	22×16	桐	顔肌・眉赤ヨコ・唇赤	唇赤	黒野桂太郎		綱之波・天皇位				在
13	飛	脚	22×15	〃	顔肌・眉赤ヨコ・唇赤	唇赤	〃	〃	綱之波・天皇位				在

犬山神楽社所蔵の神楽に関する巻物(写)によれば、「聖武天皇神龜三年春正月下旬、本宮山ニ於テ奏樂之響連宵ニ及」んだので、神主藤原保則が「斎戒沐浴し、ココニ衣冠ヲ正シクシテ、夜を侵シ独行」けば、「天女降りテ盛ニ神樂の曲ヲ奏ス。因テ之ヲ拝授シテ神樂一曲ノ伝ヲ得ル」というが信ずることはできない。しかし、江戸時代末期に発生したものでないよう

で、上津神社社格昇格の申請書には、室町時代と思われるものから江戸時代にかけて神楽に関する記事が次のように散見する

○田地屯反八幡宮為神楽免十時撰津守寄進(年不詳)

○大友氏より紫糸緘鎧屯領神楽具足として奉納(年不詳)

○大野郡中村上津八幡宮神楽役之事。大野大宮司三代右衛門大夫下社家一重郎大夫と申者片島中尾ニ住シ而当社之神楽相勉申候(年不詳)

○殿様御社参書留帳(文化四卯年二月十日)

本上津ニテ神楽三番荒神楽・武者・大神何レモ二人立。殿様拝殿前しらすより床木ニテ御上覧被遊候。

なお、前記神楽に関する巻物は文政十一年の年号があり、次の三三番が記してある。朝倉返・扇花・平手・折敷花・山吹・武者・太平楽・綱口・綱切・五方礼始・五穀・柴引・綱之武・貴弦城・心化・繩之波・誓約・両種・津留伎・返矢・天皇位・鹿兒弓・神逐・退治・降臨・岩戸・大神・天注連・高野・本手花・懸問・返舞・御湯立舞。

しかし、文久三年九月三日付の「若殿様御社参ニ而御神楽御覽被遊候分七番」と「御覽之分外書置候分拾八番」に次の二五番が記されている。浅倉返・武者・太平楽・綱伐・五方拝始・五穀花・柴引・綱之武・貴見城・心化・綱之波・誓約・津留伎・返矢・天皇位・神逐・岩戸・大神・本手花・掛問・散米・四弦・八雲弘・口覧・舞納。

文久三年の文書を信ずれば、巻物の文政十一年という年号は怪しいことになる。現在、大野郡楽員会(会長羽田野義之)では、犬山神楽を浅草流と呼んでいるが、本上津神社の記録によれば、本上津・浅草両社の神楽は同流である。

申上口上覧(文久三亥九月三日)

一、若殿様本上津宮ニ被為遊御參詣、神楽御覧の上全流之儀御沙汰ニ相成申候ニ付、全流之儀左ニ申上候。

田代組 上津宮

片島組 本上津宮

藤北組 浅草宮

柴北組 柴山宮

右四社之分全流ニ御座候。

しかし、犬山神楽を浅草流と称するようになったのは、明治以後の両神社の社家の盛衰と関連があつたのではないかと想像される。

昭和四十二年現在の楽員は別表の通りである。

綿貫 惠裕	足立 哲信	甲斐 信夫	小山 準一	甲斐 次男	綿貫 公夫	黒野 素光	足立 喜義	足立 良信	甲斐 一徳	黒野 信幸	○野中 寛	綿貫 惠敏	野村 英士	黒野 成実	足立 実男	甲斐 力	黒野 定男	甲斐 定男	足立 親恵	氏名
26	27	37	28	31	33	37	37	36	46	46	44	49	57	59	62	63	65	72	79	年令
2	2	2	3	5	5	8	8	10	20	20	23	25	35	37	43	40	43	56	64	芸歴
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	現住
																				大野郡大野町大字田代大山
																				所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	職業
																				農業

註 ○印は現樂員長